

B 5 下駄の履き心地と足裏の荷重分布について
県立米沢女短大 ○山水きぬ 石山和子

目的 生活様式が変わって、下駄はすたれたかのように見られている。しかし、少しずつ変化をとめないながらも、下駄は和服と共に生き続け履き継がれている。そこで現在市販されている下駄の中から女履きを取り上げ、その履物の種類と履き心地の関連について考察を行なう。

方法 官能的な履き心地と足裏各部の荷重分布の関係を、つぎの方法で検討した。試料の下駄は、右近、駒、日和、後丸、および時雨の5種類で、それぞれ底貼りあり、および底貼りの計10足である。各々の下駄の表面に圧感フィルム（富士フィルムプレスケール）を下駄の形に切り抜き、下駄の面に貼りつけ歩行後に、そのフィルム発色の濃淡より荷重の分布、および定量的測定を行なった。なお、被験者は和装裸足で、平坦な舗装道路を自然歩行で1000歩、1足につき3回のくり返し実験を行なった。

結果 履き心地は、下駄の表面に貼りつけたフィルム上の足跡の濃淡に関係する。すなわち、官能的に履き易いと判定された右近履きは、荷重は全体的に分布しているのに反して、履きにくい日和下駄は、荷重は小さく趾に集中していることがわかる。また、底貼りあり、なしの差異は小さく、必ずしも履き心地が良いとは限らないようである。さらに、左右差は下駄の種類によりばらつきはあるが、一般に右足の荷重が大きい傾向にある。結論として履き易さとは、足裏全体に荷重が分布していることであり、その順位は右近、時雨、後丸、駒、および日和であった。